
一つ家の鬼娘！

ぱんくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つ家の鬼娘！

【Zコード】

Z5052W

【作者名】

ぱんくん

【あらすじ】

「安達ヶ原の鬼婆」と「浅茅ヶ原の鬼婆」。

一つの物語が交差し、平凡な高校生「遠藤芳樹」に降りかかる。「何故自分が」と悩むが、そこには抜け出せない運命があった。

ハタシワダレ

昔、東京に鬼婆が居たといつ。

くに住んでいた。

どういう関係かは分からぬし、特に怖くもないのにこんな薄暗い午前3時に散歩している。

ね
み。

夏なのでそんなに寒くない。むしろ暑い。うん、暑い。

なせ）こんな時間に散歩しているか気になるだろ。簡単に語りと寝ないようだ。何故寝たくないかと言つて、今寝ると学校に遅刻するからだ。

い
く。

勿論学校で思いつきり寝るけどな！

マジで？見間違いだよな？ほらあるぞ。あれこれくる。

「見間違えといてくれ～～～！！！」

マジか！嘘だろ見ちゃつたよ！—白い女の子！やばい！逃げねば

1

「おの？」

「す、すみません! 腹かしちゃって」

えつ?人?人間?ヒューメン?

「あのお、大丈夫ですか？」

「あつ、ああ。大丈夫。うん」と

心臓とまりそうだつたけど。

「あの、こんな時間になにしてるの？」

「すみません。道が分からなくなっちゃって」

「そうなんだ。俺で良ければ案内するよ」

「ありがとうございます。この近くに池はありますか？」

「池？この近くに池は～。ああ。

「この近くに昔、池があつたらしいけど、もう埋め立てられちゃつたよ？」

「え？？」

「なんだろう。俺が生まれてくる前に埋め立てられたらしく、知らないのかな？それに見たことない子だけどこいらっしゃるんの子かな？」

「えーと、俺、遠藤芳樹。君は？」

「私？私は誰？」

「えと、これは～

記憶喪失？

いみわからん

俺は一人暮らしだ。親父は仕事で海外だ。お袋はそれについていつた。理由は仕事先がワイハだからだ。子供よりワイハをとつた。

俺は一人暮らしだ。だつた。だつたらしい。さつきまで。

「早くしろよ。早くメシ作れよ。家出しちゃうぞー」

これがだれだかわかるか諸君。さつき会った女の子だ。池の跡地まで行こうとしたら

「あなたの家つてこの辺ですか？のどが乾いたのでお水が欲しいんですけど」

自販機ないし家近いから家まで連れてきたら、

「いい家ですね。お一人で暮らしているんですか？」

つて聞いてきたから「はい」と答えるだら

「良し決めた！俺ここに住む！お前俺の召使いにしてやる！メシ作れ！」

え？何が起きた？びうしたんだ？

「おい何してんだ。早くしろよ召使い」

「あつ、あれ？キミ女の子だよね？てかこの家に住む？召使い？」

わけわからん。

「当たり前だ！女に決まつてんだろ！ナイスバディーすざるだろ

！」

「え、ええと、召つ」

「早くしろ！ハラへつた！」

で、

「早くしろよ。早くメシ作れよ。家出しちゃうぞー」

意味分からん。家出してもらいたい。てか住むとか冗談だよな？兎に角つむさいからメシを作ることにした。

いみわからん（後書き）

次回は突然家族になつた不思議な女の子の話です。

暗い。クライ。苦しい。クルシイ。ここは。ココハ。どこだ。

「コダ。私は。オマエハ。誰だ？ オマエハ！

「ツ！？ あ、あレ？ ここハどこだ？ 僕は 確か

わからない。自分が誰かも、ここがどこかも、何もわからない。なんのだろう。よく分からぬけどなぜか、凄く悲しい。分からぬが、何かに溺れていた気がする。

まあとりあえず家に帰

れない。分からぬ。でも、凄く

温かいぬくもりがある家が会つた気がす

ツ

！？

「口ロセ！ キリサケ！ カミクダケ！ アイツヲ！

ツなつ、なに？ さつきの？ 殺す？ 誰を？ 切り裂く？ 何を？

。

と、とりあえず。何かに溺れていた気がするから海とか池を探そ
う。

ん？ あそこにバカそうな男がいる
ケツケツケツ。家発見だな。ククク

←一タア

「で、」うなつたわけか「

「うん、」のオムライスそんなうまくないな。むしろへた「」いつけ

「ふう。まあとにかくソレ食つたら出でけ」

「ゴツゴホゴホツ「つえつ」

むせたよきつたねーなー

「おつ、おまつ ゴホツ ツ うえつふつ」

「おいおい大丈夫かよ。女なのにカワイクねー」

「お前はこんな身よりのないか弱き乙女に家から出でけつたんだぞ！」

「当たり前だ！第一まだ名前も知らない女子と一緒にくらせるか！」

「男なのに根性ねーな！タマ千切るぞ！」

「か弱い乙女がそんなこといつてんじやねえ！それに男だから気にすんじやねーか！」

「メンドクセー奴だな！お前なんかといたいと思つ奴ぜつてーいねーよ！」

「じゃあ出でけ！」

「えつ？」

「おお？」

「いついやつ、べつ、別に本氣でいつたんじや

んう

」

「おお。恥ずかしがつてる。結構カワいいかも。」

「いつけ、いいから俺をここに住まわせる！このクソハゲカス！」
いや、それでもねーな。

「取りあえず名前教えてくれよ

「は？」

「いや、名前。」

「お前人の話聞いてたのか？記憶喪失で忘れちつたよ」「え？ 本当二兄意識失ひながら？」

「本には記憶喪失なのかな？」

「当たり前だ！ でなきや家でねてるよー。」

うーん。本当に記憶喪失か。ビッシュヨウ。交番？病院？病院やつ

てつかな? 今何時だろ

卷之三

あなたがおせなか

- お前と語りたい8話 -

「学校遅刻を俺のせいにすんなよ！」

学校つてなあに?」

ルーフラッシュ

11. こいつら (後書き)

次回をお楽しみに！

池にある

とりあえず俺は学校に来た。名無じの女は家から追い出し、鍵をバツチリかけて家を出た。女は池を探すらしい。

「池が凄く気になる。池にはゼツテーなんかあるー。」
「水だよ。池にはゼツテー水があるよ。まあ面倒だからいわなかつたケド。」

一時限田は理科か。移動があるな。

「おい遠藤！ 理科室いこーぜー！」

「おう。てかお前声うるせ。」

「お前の聴覚がすげーんだって。ハツハツハツ！」

ハハハじやねえよ。横山とは中学からの友達だ。下の名前は忘れた。悪い奴ではない。

「なあ知ってるか？」

「何を」

「お前が住んでる所って、昔鬼がいたんだってよ」

「聞いたことがあるわ。それ」

「でさあ、歴史のレポートそれこしよつぜ」

「いつは句言つてんだ。噂を調べてどつある。

「割と有名なはなしでよ、「三枚のお札」って話か？」

「あれだろ？山姥から三枚のお札をつかって逃げるやつ。」

「ああ。それと関係してゐるひじー」

「ほんとかよ」

「それを調べて今日、図書館にこいつ

メンド。でもまあ、いいか。早くレポート書いひつ。

放課後だ。

「うしつ！じゃあ行くか！遠藤！

「おひ

結構早くついた。そして早く資料がみつかった。

正直驚いた。伝説の名前は「浅茅ヶ原の鬼婆」というらしい。

近くの池の跡地がどういう物かも分かった。

少し、ほんの少し、恐怖を感じた

池にある（後書き）

「浅茅ヶ原の鬼婆」（あやじがはらのおにょば）は、いかんとした昔話です

昔、京の都に岩手といつ女性が三人の娘と幸せに暮らしていた。ある日、長女が病に掛かり喋る事が出来なくなってしまった。占い師曰わく、「腹の中の赤子の肝を与えれば病はなくなる」とのこと。

岩手は三人の娘を残し北へ旅立ち、奥州の安達ヶ原にたどりつき、そこの小屋で獲物をまつた。

何年かたち、一組の若い夫婦が一晩泊めてくれと訪ねてきた。なんでも、婦の腹には子がいるという。

岩手は夫が出来ている隙に婦の腹を切り裂いた。そして喜びに浸つた。「これで娘の病は治る」と。

岩手は笑いつづけた。笑い疲れたころに、夫が帰ってきた。夫は鳴きながら婦の名前を叫んだ。そんな夫を岩手は、

殺シタ

首を切り裂き、はらわたをえぐり出した。

あとは京にかえり、娘に会うだけだ。だが、岩手はきずいてしまつた。夫の叫んだ名前。

どこかで聞いたことがある。不意に、夫婦の肉塊に田をやると婦の手にお守りが握つてある。それを見て岩手は全てを悟つた。

殺したのは自分の助けようとした娘で、自分は娘とその夫と孫を自分の手で八つ裂きにしたのだ。

右手の頭は乱れ、宿を借りにきたものを全員殺した。

右手は鬼婆となつてしまつた。

まつた。

安達ヶ原の鬼婆（後書き）

次は三枚のお札です

三枚のお札

殺戮を繰り返した岩手のもとに、一人の坊主が宿をかりにきた。岩手は坊主が寝ている隙に坊主を殺そうとしたとき、坊主はそれに気づき、一目散に逃げ出した。

岩手は坊主を追いかけた。坊主が札を投げると、札は大河になつた。

岩手は大河の水を飲み干し、さらに坊主を追いかけた。坊主が2枚目の札を投げると、札はアリ地獄のようにになつた。岩手は先ほど飲んだ水を吐き出し、砂を滑らないようにしてさらに坊主を追つた。

坊主が三枚目の札を投げると、札は炎になつた。岩手は火傷をして気絶してしまつた。

目が覚めるとそこは知らない所だった。どうやら家のようだ。

「お母さん！良かつた！目が覚めたのね！」

知らない女性が二人いた。話を聞くと、二人は自分の娘で、姉の事をしり、安達ヶ原（奥州）まで岩手を探しに行き、倒れていた岩手を近くの街まで担いできて、医者に治療してもらつたそうだ。

その後、岩手は浅茅ヶ原（江戸）で娘と宿屋をしながら幸せに暮らした。

三枚のお札（後書き）

次回は浅茅ヶ原の鬼婆です

浅茅ヶ原の鬼婆

岩手は娘と宿屋をしていたが、最早鬼婆となつしまい、旅人を殺す事を止めるることは出来なかつた。

岩手は旅人の頭を石で割り、賃金を奪つてから近くの池に遺体を捨てていた。娘はこの行いを見て見ぬふりしていた。

死者が999人に達した時、一人の若い男が宿を借りにきた。男と三女は恋に落ちた。それを知つた次女は男に訳を説明し、三女を連れて逃げるようになつた。だが逃げた事が分かれれば岩手は男を追う。次女は自分が囮になると決めた。

夜になり、岩手はいつものように寝てゐる旅人の頭を石で殴り殺した。

旅人の体をまさぐつてゐると、妙な事に氣づく。旅人は男の筈なのにまるで女のようだ。

死体の顔をみて仰天した。そこには自分の娘がいた。岩手は自分の娘を一人も殺してしまつた。

岩手は鳴きながら娘の死体を抱き、いつも死体を捨てていた池に身を投げた。

「それがあの池か。」

俺は図書館で借りた本を読みながら呟いた。

なんと呟つか、驚いた。結構マジメな話だったな。

「その話にや続きがあるぜ」

「うわっ！ いつ入ってきた！ なんで帰ってきた！」

「自分ちに帰つて悪いか？」

「この女マジか？ てか何かテンション低いな。何かあったのか？」

「いや。心配してるとかそんなじやないゾ？」

「何ブツブツ呟つてんだよ」

「いいいや！ 別に。」

「聞こえてないよな？ エスペー？」

「てか、続きをなんだよ。記憶なくしたんじやねーのかよ
ちょっと意地悪に呟つてみる。」

「やつを想い出した。」

「ノーヤロッ」

「全部思い出した。名前も、過去も、自分がどんな奴かも。」

？

「兎に角その話の続きを話すよ」

なんかしおりしき。落ち着かないな。

浅茅ヶ原の鬼婆（後書き）

「コメント頂ければ光栄です。」

何なのだろう。落ち着かない。朝は凄くうるさかったのに、今は不自然なほど静かだ。何かあつたのだろうか。

「お前、今日どこでたんだ？ 何かあつたのか？」

「お前にや関係ねーだろ」

確かに関係ないが、何か気になる。しゃあねえ。

「関係あるさ。俺はお前の家族だ」

あーはずい。「あるさ」ってなんだよ。「そ」って。

「ここに住むの認めてくれんのか？」

「まあな。兎に角記憶治つたなら名前を教える。んでなにがあつたかおしえてくれ

「ああ。じゃあとりあえず、俺の名前は野菊のぎくだ。」

「名前 じゃないか。変わった名前だな。

「信じてくれないだろうけど、俺は

「

話をきいて驚いた。正直、信じられない。俺は言葉が出なかつた。

見てくればありがとうございます。

岩手の手からにげた男と三女は数ヶ月後、事件があつた浅茅ヶ原の家に戻り、幸せに暮らしていた。

だが、岩手の噂は江戸中に広まつていて、男と三女の心を苦しめた。

そして男はストレスから女と浮氣をした。だが、三女は咎めることなく男を愛し続けた。

ある日、男は知らない女を連れてきた。いや、知っている。男の浮氣相手だ。その腹は大きくなっている。

男は口を開いた。

「このとつりだ。私はこの女と子を作った。この女を愛した」

知つていてる。以前から知つていてた。でも、それでもよかつた。

「知つていたわ。でもいいの。それでもあなたを愛してる」

「離縁しよう」

「？」

何故？三女は男を愛しててるのに。何故、離縁なんてする必要がある？

それは至極簡単な事だ。

「私はこの女を愛しててる。お前を愛することはできない。離縁をしよう」

三女は怨みを覚えた。それが誰に対してもか分からない。三女は無意識に包丁で男に切りかかつた。だが逆に男は三女を殺した。

いつなることはわかつてていたのだ。何せ、三女は鬼婆の娘だ。

さうに言えば、男は離縁などする気はなく、最初から三女を殺し

にきたのだ。

男は三女の遺体を右手が身を投げた池に捨て、浅茅ヶ原の家で女と仲むつまじく暮らした。

「この浅茅ヶ原の鬼婆といつ話は、一つの家でおきた事件だからちのち、一つ家の鬼婆とも言われるそつだ」

うーん。謎だ。色々気になる所はあるが、一番気になるのは何故、こんなにくわしい？

記憶を無くす前はオカルト好きだったのか？

「おい。何黙つてんだ」

「あつ、ああ。悪い。でもよく知つてゐるな。いつこの好きなの

？」

「。」

やべ、禁句か？

「え、えーと、野菊だったよな？い、いやー変わった名前だね。」

「。」

さすがに失礼か。

「な、名前といえば、登場人物の名前がわからんから面倒だな

「知つてるよ。名前

やつとしゃべつた。

「へ、へー。凄いね！よく調べたよー。うんー。」

「 。」

「じ、じゃあ三姉妹の名前教えてよ」

「長女が桔梗^{ききょう}。次女が笹百合^{さやかゆり}」

「三女は？」

「三女は

じつしたんだ？忘れたのか？」

「三女の名前は

野菊^{ノハグサ}」

「ん？野菊？野菊つてお前と一緒にしゃん。あ、もしかして三女つてお前なんじやね～の～？」

ちやかしてみた。

「ん

まじで？

普通は信じない。目の前にいる女は鬼婆の娘で、何十年、何百年も前に死んでいるんだ。だが俺の中の何か、いや、誰かが

「彼女を信じ、彼女を受け入れ、彼女を愛し、彼女に許しを請え」

と呟く。
誰かはわからない。
聞いた事もない。

「わるいな。信じないよな、こんな話。忘れてくれ。」

凄く寂しそうだ。放つておけない。いや、放つてはいけない気がする。

「いや、信じる。お前を信じるよ、野菊！」

「え？ 何でだよ。普通は信じないだろ。お前の頭おかしいんじやねーか？」

「確かにおかしいかもな。でも、お前を放つてはおけない。記憶

は全部思い出したのか？」

「いや、まだ少し曖昧な所があるけど」

「なら少しの間、記憶がはつきりするまで」の家に住むといふ

「いいのか？」

「ああ。家族にしてやるって言つたしな」

何故か抵抗がない。この女、野菊と家族になり、共に生活するの
は運命なのかもしれない。

「あ、ありがとう」

「泣いてんのか？」

「ば、馬鹿。お俺が泣くわけないだろ」

「強がりやがって」

野菊に聞こえないくらいに咳いた。俺は微笑んでいた。野菊のこう
うこう所、嫌いじゃないらしい。いや、むしろ。

「ケツ、らしくねえか。お前も泣くなんてらしくないぞ、野菊。」

「だ、だから泣いてねーって！」

「ハハハツ」

「わつ、笑うな、ボケ！！」

「さあ、もう夕飯だ。何か作るか？」

「オムライス」

「いいぜ！得意だからなー！」

「不味いけどな」

「つるせえ」

何か「コイツ、昔の人なのに現代的な言葉つかうよな。服も着物とかじゃないし。

まあ今度聞けばいいか。取りあえずオムライス作ろひ。野菊つるさいからな。

「なあ野菊」

「んあ？」

「「」れから宜しくな

「い、いいから早くオムライス作れ、バカ芳樹！」

「はいはい」

ホント素直じゃないな。まあそれがいいとこか。
ふと野菊を見ると、何やら旅番組を見てるらしい。
箱根か？

「なあ芳樹へ」

「ん~？」

「新婚旅行」「なんてどうだ~？」

「は？」

「だ~か~ら~、新婚旅~お~」

何いつてんだ?この女。

「え?と、誰の?」

「バカッ!俺達のに決まつてんだろ!」

「なんだよ新婚で!」

「だつてお前が言つたじゃねーか!家族にならう、一緒に住もうつて!」

「いやいやいやつーそつ言ひ意味じやないからつー..」

オムライスを作る手は止めない。

「子供は何人かいいんだ?10人でも20人でも俺頑張るぜ?おつと、夜が大変だなあ。少しは寝かしてくれよ?」

「バツバカ!なにいつてんだ!恥ずかしくないのか!」

そんな話をしながら割つた卵は双子だつた。

家族（後書き）

ユニーク100人超えました。ありがとうございます。

頭痛

あう。寝れなかつた。もう毎の12時だ。昨日寝たのが深夜3時
ぐらいだから大体7時間?8時間?まあそんぐらいか。
そして隣にはトンデモ女野菊が寝てる。嫌、何もなかつたぞ?
ただ一緒に寝ただけ。

寝るとともに野菜が

「子供欲しいだろ？早くしようつぜ？」

と言つてきた。野菊曰わく、「男がリードしなきや いけねえ」らしい。俺はそれを利用して、とりあえず一緒に寝て、そのまま放置した。賊に言う「サイテーな男」だ。でも野菊だから別にいい。

「おい野菊。朝だぞ、起きる。」

ん? 何かうなされてる。

「お、い、ど、う、し、た、野、菊、大、丈、夫、か、？」

「う、うう。頭がいたい」

おいおい大丈夫かよ。

後分數

「おいテメエー、どうした事だー！女の子を放置プレイってー！」

「朝（昼か）からうるせーなー。そんな事より頭大丈夫か？」

「テメエー（怒）二人の愛の育みをそんなことってなんだー！しかも人を変人あつかいか！」

「いやいや悪かった。主語がぬけてた。さっき頭が痛いつてうなされてたから」

「ああ？ そんな事いってねえ。今は頭より愛の方が大事だー！」

朝から疲れるなー。今日学校休みでよかつたわー。しかもあと3日行つたら夏休みだし。

とりあえず朝メシ食うか。

「野菊、お前何か作れるか？」

「卵かけご飯」

「チャーハン作つてやるよ」

「チャーハンつて？」

「見りや分かる」

「いっつの生きてた時代にチャーハンはないのか。

「いっつの生きてた時代？ いっつの生きてた？ 生きてた？

？

「な、なあ野菊？」

「ん~?」

「お前は何年も前に死んだんだよな?」

「ああ。殺された」

「お前は今なんなんだ?もしかして、幽靈?」

「いいや。ちゃんと心臓は動いてるぞ?まあでも300年も生きる人間もいなide」

聞かぬきやよかつた。少なくともこの女は人じやないって事か。

野菜炒め

ねーみ。もう朝だ。しかも今日から学校だ。とりあえず野菊起こすか。

「おい、野菊。もう朝だぞ。起きろ。」

つていねえし。もつ起きたのか？あいつが早起きなんて、何か違和感があ

「朝だぞ、起きろ！バカ芳樹！…」

「うわっ！」

いきなり、ドアをぶち破る勢いで野菊が部屋に来た。

「朝ご飯作つといったから、早く準備して学校遅刻しないよつつけよ？」

つって元氣よく部屋から出て行つた。何なんだ？鬼に角飯食うか。

「おう芳樹！冷めねーうちに朝飯食え！」

テーブルには「」飯と野菜炒めと味噌汁がおいてある。

「なあ。」これ全部野菊が作ったのか？

「当たり前だ！他に誰がいるんだ？」

野菊は台所から叫んだ。今度は何作ってんだ？
俺がテーブルにつくと、ほぼ同時に野菊が向かい合つて座った。

「うまいか？美味しいか？」

ジアイニアーズムかよ。まだ食べてねえし。
じゃあどうあえず、野菜炒めを食べてみるか。

「な、なあ野菊。これホントにお前が作ったのか？」

「お、おう。美味しいのか？」

「嫌、嫌くうまい！驚いた！」

「ホントか！？良かつた！」

凄く嬉しそうだ。コイツは時々、女の子らしい可愛い顔をする。
俺は野菊のそう言つ所が、凄く愛おしく思える。

「じゃ、俺もたべよ。」

野菊が箸を取つた。何か、一人じゃない朝ご飯は久々だ。最初に
野菊がここに住むといった時は驚いたが、案外悪くない。

「おい芳樹、早くしないと学校遅刻すんぞ」

「ん？あ、ああ。」

変なこと考えてないで、飯食べて早く学校行こう。遅刻やだし。
今何時だろ。

「 ああ――――――」

「 うわあ――なんだよ、びっくりせんなよ――」

何だ、自分の事は棚に上げやがつて。ってそんな事いつてる場合
じゃない―もう8時10分！ 遅刻寸前だ！

「 悪い野菊！ 学校遅刻しそうだからもう行くわ――」

俺は急いで家を出よつとした。

「 まて芳樹―お弁当―」

「 あ、ありがとう。コレも野菊が？」

「 お、おひ。残してくれなよ――」

「 ああ勿論―じゃあなつ―」

「 ま、まて―むつ―つ―

「 今度はなん

チユ~~~~~ウ

ん？ 何がおきた？ 唇に柔らかい物が、少し強めに、~~まいり~~なく当
たつている。

「 うひ、行つてらひしゃこの、チ、チユウ だ。」

「 え？」

「は、早く行け！遅刻するぞ！」

「あ、ああ。いつき ます」

俺は玄関のドアを開けた。

「は、早く 帰つて いい よ

「ん？何か言つたか？」

「バ、バババ、バカ！！！何も言つてねえよ！早く行けクソ！」

ゲシッ！！！

いって！！あの野郎、人の事蹴りやがった！

ファーストキスが野菜炒めの味だった

。

野菜炒め（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

弁当

一 講動のあと、俺は学校に来た。今は休み時間だ。騒いでいるおそらくサッカー部と、それを見て笑う女子。俺アイツらみたいな女子なら野菊の方がまだマシだな。

「なーにがマシなんだ~?」

「うわっ! なんだ、横山か。」

「マイツは横山。前は知らん。中学のころからの・・・デジヤヴ? 「それよりよ~。レポートびすんだ? ちゃんと調べたか?」

ああ。マイツ前に登場してたな。一緒にレポート書いたとかいつて。その内容は・・・。

「なあ横山。やつぱりめぐらしあつべよ?」

「お~お~冗談よせよ。俺メツチャ調べたぞ?」

横山には悪いけど、野菊の事を考えるとなんつーか、な?

「俺チヨー調べたんだ! 何か・・・」

そう言って野菊が話してくれたことと同じような事を、淡々と話し始めた。ただ、一つ新しい情報があった。野菊を裏切った男、つまり野菊の夫の子孫がこの時代に生きているらしい。

横山は

「あくまで尊。だいたい、作り話の登場人物の子孫なんているか」と

と言つてたが、俺は野菊が居るから信じるしかない。なんて考えてたら午前の授業が終わり、昼休みになつた。

「おい芳樹。学食にいづかへ。」

「ねつよ」

俺と横山はいつもこんな感じだ。なんつーか、コイツはあきない。だいぶ仲が良い。と自分は思つてこる。コイツは知らんが。

「わて、今日は向こみうかな~」

俺が何買つか迷つてゐる

「えいむけロロッケパンだら~。」

クソ、横山め。俺だつてたまには違つのも食べる。

「えうこつお前はぢつせサンドイッち・・・
つてもつぱりてんじ、サンドイッち。サンドイッち

「お前につもサンドイッちで言ひ乍ら、俺的サンドウイッチだ
と黙つよ。」

また意味分からん事いつてきやがつた。

「バカ。ウイツチだと魔女が作ったみたいだろ」

なんてくだらない」と言いながら、俺はコロッケパンを買った。

「よし食べるかー」

何かいつもコイツと食べてるな。

「あ

「?ビーフした芳樹。」

そうだ。思い出した。今日は野菊が弁当作ってくれたんだ。しゃ
あない、今は弁食べてパンは野菊にお土産だな。

「パン食べないのか?」

「やーらん。」

弁当を出したら横山が絶叫し、「もう一緒に食べてやーらー」と
怒鳴った。明日から一人で弁当か。

よしつ。学校終わつたから帰るか。野菊の弁当がスゲー美味かつた。

「ふう。」

ため息ついいちつた。さてどうするかな。

野菊を裏切って、しかも野菊を殺した男の子孫が、今生きてしる、勿論、その子孫は野菊とは関係ない。でも野菊がそれをしつたらどうするだらう。

野菊は裏切った男を恨み、殺そうとした。だが逆に殺され、裏切った男は幸せに暮らし、子を残した。

野菊に向かって迷ひついで家についてしまった。結婚といつぱりいいんだが。

一
た
だ
い
ま
～

ん？ なんだ？ 変なうめき声がきこえる。野菊か？

「お~い! どうしたん? ・・・」

—ぐ、ぐあああ・・・・・

野菊が頭を抱えてうずくまつていた。

「お、おい野菊！どうしたんだ！？大丈夫か！？」

「ぐ、あ、頭が・・・痛・・い。」

頭？前にも頭が痛いと、うなされてたが、なんなんだろう。病気か？

「と、とらあえず、病院か？救急車？ビショウ！」

やべー。超テンパってる。ヘタレすぎるな。

「いや、大丈夫・・・だ。芳樹のおかげで落ち着いた。」

俺なんもしてないけど。

「とらあえず今日は休め。今度様子を見て病院にいこう。」

「い、いいよ！俺は大丈夫だ。病院なんて・・・いい。」

「いやいや、前も頭痛いっていつてたやん！今度の休みに病院いこう。いつたほうがいいって。」

「いいくて！頭なんか痛くない！病院なんていかなくていいんだ？なんでこんなに病院いきたがらないんだ？」

「あー、

「それより芳樹！ちゃんと弁当食べたらうな！残してたら承知しないぞ！」

「ああ、ちゃんと美味しくいただきましたよ。コレ、間違つてか

つたパン。やるよ

「お、おひ」

「さて話を戻して、今度病院いへど。」

「クソッ」

「話の逸らしかたが強引なんだよ。で、なんでそんなに病院がやなんだ?」

「べ、別につ!別に病院いくほど痛くねーからだよー。」

「イツまさか・・・

「なあ。お前もしかして・・・・病院怖い?」

「!」

「ぼしか。

「いいいいいいやー別に怖くねえよー怖いわけねえよー。」

「怖くないなら次の休みは病院だ。」

「う、ううう・・・。どうじてもか?」

「いいや。様子を見てだ。よくなれば行かない。」

「ほんとかー?」

「ああ。だから病院いかなくてすむように、今日はもう寝る」

「ねじすみ。」

何か・・・あつかいやす

さて、風呂も入ったし、もう寝るか。野菊にあのこと言うかいわないか、まだき決めてない。まあ明日考えるか。今日は寝よう。

俺は自分の部屋にいった。が……！

野菊のいびきがつるやうなので今日はソファーで寝る事にした。

凶み（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございました。これで一冊です。

当然の一撃

もう朝か。ソファーで寝たから首が痛い。野菊はまだ起きてないようだ。昨日すげー早く寝たのにまだ起きてないって事は、結構具合が悪いのかもしれない。

今日と明日学校にいったら夏休みだ。なるべく早く、野菊を病院に連れて行こう。

7時半か。準備してもう学校に行こう。・・・・?

心なしか、リビングが片付いているきがする。溜まっていた洗濯物や食器も洗つてある。もしかして昨日野菊がやつてくれたのか? きつとそうだ。アイツはあんな性格だが、割と家事が出来るらしい。

「ん~。おはよう芳樹~」

「ああ、おはよう野菊。具合はビビりだ?」

「おうー!バリバリ元気だぜー!」

なんか小三の男子みたいだな。

「つーか芳樹、早く起きたなら俺の事起こせよ。」

「ん?ああ、昨日頑張ってくれたみたいだからな。今日は休ませてあげようと思つて。」

「昨日?昨日なんかあつたか?」

「掃除とか洗濯とか、野菊がしてくれたんじゃないのか?」

「なんだ、そんな事か。そんなの嫁として当然だつ！」

ああああ、そうだった！　コイツ嫁になつた氣でいるんだ！

「子作りの前に、まずは嫁らしくしないとなつ。」

「そうか！だから昨日あんなに頑張つたんだ！」「いつてらつしゃいのキス」とかいつてファーストキスを野菜炒め味にされたんだ！

「家事は得意だ。ちゃんとお前の部屋も掃除したぞ？」

「なに!?」

「おお、うんとすみずみまで……あり。」

どうしたんだ?

なんだ？歯切れが悪いな。

お前が……そこ……：：：好きなら……」「

顔を赤くしている。まさか！

「お、お前がそういうの・・・好きならつー俺つ、鞭も紐で縛るのも頑張るからつー・・・お、おおお、おじうの方・・・でも・・・」

叫びながら自分の部屋にダッシュ！
ヤバイヤバイヤバイ！――完全に見られた！ベッドの下が片付いてる！

「よ・・・芳樹?」

部屋の扉の所で、野菊が顔を赤くして立っている。

芳樹

「ち、違う！ これは俺の友達の横山つて奴が・・・！」

芳樹。お、俺・・・今からでも・・・」「

「だ、だだだ、だから！ これは友達の横山が置いてつただけで、けつして俺の趣味ではない！」

「い、いいんだぜ？ お、俺も少し、興味・・・あるから・・・。」

ヤ、ヤベエ。目が虚ろだ。コイツ目覚めちつた・・・。

「よ、芳樹？お、俺。 も、もう……。」

ササギー

学校遅刻しちまつた。あのあと的事は・・・思い出したくない。

「よつ遠藤！お前今日も遅刻かよ。留年しちまつぞ。」

ギロツ！

「な、なんだよ、怖い顔して・・・」

「・・・・・ジャストショーマッシュ（当然の一撃）！――！」

「ばつぐん！」

夏休み

「ええ。で、あるからしてつ、夏休みは非常～つに~~が~~がゆるみや
すい。」

バタツ

「なのでしつかり気を一引き締めて一楽しい夏休みをす」しほし
「う」

バタツ

「えへ、話は変わりますが・・・」

バタツ

「それでは話を終わりにします。楽しい夏休みを。」

あの野郎話長すぎるだろ。校長特権か？

「これで閉業式を終わります。一同、礼づ」

やつと終わつた

「」のあと、生活指導の先生からの連絡が・・・

あ、意識が…………バタツ

「…………くん、…………藤くん、…………遠藤くん！」

「うおえ？」

「あ、気づきました？」

「多分」

「よかつた！」ナツが「鬼がついてる」なんて言つからしんぱい
しゃいました」

「うん？ どんな状況だ？」

「閉業式で倒れた」

「うわっ！」

「失礼な反応だ。芳樹。」

「そうですよ遠藤くん。ナツにお礼を言わないとダメです。
倒れた遠藤くんを保健室まで運んできてくれたんです」

「憂も手伝った。」

ああ、思い出した。校長のせいで倒れたんだ。

「で、今日倒れた人数は？」

「あなたを入れて23人です」

いつもより少ないか。

「軟弱だな、芳樹。」

「うるせえ」

勝手に話を進めているが、コイツらの事を紹介しないとな。
まず、この敬語を使うのが瀬野崎憂佳。

で、もう一人の背の低い、無表情がナツ（本名不明）。

二人は仲が良く、小さな頃からの友達らしい。ちなみにナツの本名は瀬野崎しか知らないと言う噂がある。

瀬野崎は面倒見が良く、ナツのお姉さんみたいだ。そしてナツは口数が少ない不思議系。オカルトが好きらしい。

「黒魔術とかやってる」

と自慢気に言つてきた事がある。嘘だろうとバカにした次の日、
捻挫したのは偶然だと信じたい。

二人ともクラスメイトで、ナツが俺になついた事がきっかけで、
瀬野崎とも話すようになった。

「なあ瀬野崎、今どんな状況？」

「今校内にいるのは私たち3人と先生だけです。」

「マジック」

「マジですか」

「芳樹のせいだぞ」

「なんでたか」

ナツはいつもこきなり話に入ってくれるな。

「じゃあもう帰りまじょか。先生方に迷惑かけてしまいました」

「帰る」

「そうだな。遅くして悪いな、瀬野崎」

「いえいえ」

「ナツにも謝れ、芳樹」

「やなこった」

「フフフッ」

「じゃあまた、夏休み明けに

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「はい。遠藤くん」

「うん、バイバイ、芳樹」

「バイバイ」

さて、帰るか。

お祓い

「ただいま～」

「おかえり芳樹～」

「おかえりなさいませ、芳樹様」

・・・あれ？ 何か多くね？

「お邪魔しております、芳樹様」

「あ、ええと、どちら様？」

「陰陽師だとよ。俺を祓いにきたんだと。」

野菊が不機嫌そうに答えた。

「「」の野郎一時間ぐらこ前にいきなり来て、

「あなたを祓います！」（ものまね入つてる）

とか言いやがった。どうこう事だ？ なんで知らない奴にドア開けた瞬間死ねつて言われなきやなんねえ。」

大分怒つてんな。しかも似てねえし。

「ええと、とつあえずお名前は？」

「申し遅れました、わたくし、陰陽師の花開院椿と申します。」

「えと、椿さん。『』用件は?」

「『』の家に取り付いた鬼を祓いに来ました。」

「その鬼と『』のは野菊ですかね?」

「はい。」

何かこの人怖いな。

「おい何やつてんだ芳樹。 そんな奴早く追いで出せよ。」

「だまりなさい魔性の物。 あなたとは話をしません。」

「なんだとクソ女!」

「おい落ち着け!」

身を乗り出す野菊を止める。野菊と椿さんは気が合わないらしい。
当たり前か、鬼と陰陽師だからな。

「と、止めるな芳樹!俺はやうなくちやいけないんだ!みんなが
!みんなが待つていいんだー!・・・・・たはつ!」

言いながら倒れるモーション。『』につ俺のマンガ勝手に見やがつ
た。

「何ふざけているんですか。」

そして椿さんの冷たいツツ口!!!。

椿さんは野菊を祓うために、わざわざ京都から来たらしい。椿さんの家は代々陰陽師をしていて、椿さんはそのあととりになる修行中らしい。椿さん曰わく、野菊は早く祓わないと俺が不幸になるらしいんだが・・・

「ですから、今すぐお祓いしましょ。それがあなたのためあります。」

「勝手に決めんなクソ」

今日の野菊は「」とやら機嫌悪いな。

「祓うつていうと、野菊はいなくなつてしまふんですね？」

「はい。祓う＝殺す、と思ってください。」

イヤイヤイヤ、怖いって。なんで静かな顔でそんな事言えるんだ。

「まったく、なんて野郎だ。まるで殺人鬼だな。」

「殺人鬼？鬼はあなたでしょ？」「

「なんだと！？」

「まてまてまてー。」

「わざと回じパターンじゃねえか。」

「・・・すみませんが椿さん、お祓いは遠慮します。」

「え?」

驚いた顔だ。

「で、でも、早く祓わないとあなたが不幸になりますよ?..」

「なんて言つが、今野菊がいなくなる方がやなんですよ。どんな不幸かわかりませんが、野菊がいなくなる事が不幸なんぢゃないかなと。」

「キヤーー芳樹イイ男つー!」

「わせえな。

「つーわけだ、陰陽師!とつとこ京都に帰れ!ほれほれ、上洛じやー!」

「調子に乗りすぎだ。」

「シンジー!」

「いてつ」

「なんだとつとつて。ハム太郎か。」

「いいじゃんか〜。」

「・・・んんん〜〜」

あ〜、椿さん〜の忘れてた。

「いいんですか〜? 不幸になるんですよ〜。」

「え、ええ。」

「・・・そうですか。なら、いいです。」

「すみません、わざわざ京都から来てもらつたのに。」

「明日も来ます!」

「え?」

「明日も来て説得します。」

「また京都から?」

「今日は近くで宿を借りていま〜すから。」

「マジかよ」

「それではまた明日。失礼しました。」

と言つて椿さんは出て行つた。

な。

明日は野菊を病院に連れてく予定なんだけど

「よしぃ、じゃあいくか。」

「どういへ？」

「病院」

「いってらっ」

「いってき。椿さん来たら祓われないよ」

「やひばりこひやるよ」

「よしあつけ」

野菊も椿さんは苦手らしい。まあ、自分を祓おうとする人を好きにはなれないか。

病院へは電車で10分ぐらいだ。野菊は初めての病院＆電車だが、まあ大丈夫だろ。普通にしてれば。

「こなんじゃ俺はとめられなーぜーおりやつー」

「馬鹿、改札飛び越えんな！」

先が怖いな。マジ静かにしててくんねかな。

そんな事を言つてたらもう着いた。案外、野菊は静かだ。

「おい野菊、ここでおつるだ

ପାତ୍ର

難なく、いや電車おつるだけで難があるわけないか。と思つたが現実はあまくない。

「よ、芳樹・・・。」

「ん？ 何だ？」

一 よ、酔った・・・ねえい

「わわわわー！までー！」で泣くな！」

なんて電車で10分ゆらわたたけで酔こんだよ！てか電車そんなに揺れなかつたんじやね？

「鬼に角便所だ！便所にいくぞ！こい！」

急いでトイレにきた。

「ここで待ってるから行つてこい！」

「んん！ いつ しょ に きて！」

「馬鹿女子便だろ・・・ついていて！髪の毛ひつぱるな！」

「よ、芳樹・・・。ダメだ、こんなところで。せまいよ。あんあつ。だ、ダメ。もう我慢出来ないつ。俺、もあつ・・・。

オエエエエエエエエエエエエエエエエエエ

うわきたねっ！見ちつた。俺もはきてえ。

てか何でこの野郎、俺をひっはってきやがった。でも野菊が男子便に入つてくれてよかつた。野菊は・・・別に気にしないだろ。

「うー。気持ち悪い。」

「多少は楽になつたる。むづこくぞ」

野菊の手を引いてトイレを出ると、そこには全員が俺を睨んでいた。ここ男子便だよな？普通野菊を変な目で見るだろ。野菊を見ると、虚ろな目で下をむき、顔を赤くしている。

「わ、私、オトナになっちゃう……」

「黙れ」

以外にも診察は早く終わった。その理由が・・・

「あ～ムカツク！何なんだ！電車で酔いながら歩み出されてやつたのに解らな～って！医者だろー？」

「まあまあ、落ち着けよ。医者にも解らな～」とあるんだよ

「しかも聞いた？「様子見ましょ」つてもう様子見てきたんだ

「わかつたわかつた。なんか買ってやるから」

「服買え」

男っぽいんだか女の子らしいんだか・・・。

服

さて、無事診察も終わって帰りたい気分だがそつはいかない。野菊の服を買う事になつた。

思えば野菊は自分の服を一着しか持つてない。

普段は俺の服を着て、今日みたいに出掛ける時は自分の服を着る。勝手に俺の服を着るのはどうかと思うが、上手く着こなして全く違和感がない。

まあ、とりあえず適當な物を買おう。男用の服でもいいだろ。いい感じに着てくれるし。

「おい芳樹、こんなのはどうだ？」

「あーあ、いいんじゃなーいの?」

「ちやんと見ねーと爪剥ぐぞ?」

何でそんな怖い事が簡単に言えるんだか。

「お前なら大丈夫だろ、何でも似合つし……え?」

「そつか!?似合つか!?まさか芳樹からそんな言葉ができるとは思わなかつた!よし決めた!これにしよう!」

「いやいやいや、いや、いやいやいや。それはどうよ!」

「あんだよ、何か文句あるか?」

嬉しそうな野菊の手には白と水色のかわいいフリフリワンピース

がある。

「芳樹が似合つなんていつてへれるなり、俺毎日これ着ちやうかもつー」

「わー。超嬉しそうだよ。迂闊に似合つなんて言つたじやなかつた。もうちょっとクールな奴買つのかと思つたが、白と水色のフリフリ。

「おー芳樹つ、向してんだ、早くしぃ」

「な、なあ野菊。まだ時間あるじゅうじつと見てみないか?」

「まさか芳樹がそんな事言つてくれるなんてつ。今日の晩ご飯は何がいい?何でも頑張つて作つてやるが?」

メツチャ女の子やん。話聞いてねえし。
まあ、こんなに喜んでるんだからいいか。そいまで変でもないだろ。

「化け物がそんな物を着るのですか?」

「ああん?」

「ゲッ、この声は・・・。

「何だよ陰陽師。テメヒソ陰陽師りしく巫女服でも着てゐ。キモマニアなら喜ぶぜ?芳樹とかな

「陰陽師は巫女服なんて着ませんわ。でも芳樹様が喜んでください

るなら着よつかしら。あなたから芳樹様を奪いとつてあげますわ

「の二人、仲の悪さが普通じゃないな。しかも勝手に人の好み決めやがつて。いや嫌いじゃないよ?むしろ好きだよ?」

「お前じや奪えねえよ。それに芳樹は俺の事が好きなんだ。他の女になびいたりしねえ。行くぞ芳樹」

「お、おう」

「申し訳ありません芳樹様。家にお伺いしようと思つたのですが少しやる事が出来てしましましたので、後日に致します。」

「あ、はい。じゃあまた今度」

「別に来なくていいぞ。その方が平和そだだからな

「……………ん。」

？椿さんがなんか困つたような顔だ。いや、悲しそうな顔か？どつちにしても気になるな。

「芳樹様」

「何ですか？」

「……………野菊と生きるなら、覚悟はしておいてください。とりあえず……………今日あたり……………」

「え？」

椿さんは俺の耳元で、小さな声で呟いた。
野菊に聞こえないよつこ。

「何してんだ？早く帰ろうぜ」

「あ、ああ。じゃあ椿さん、また今度」

「はい。時間をとらせてしまい申し訳ありませんでした。くれぐれも、お気をつけてください」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あ～、結構疲れたわ。早く帰りたいけど・・・。

「・・・よつた。助けて芳樹」

コイツは電車に乗せない方がいいな。

「ただいまー」

「おかえりー。ただいまー」

「おかえりー」

もうこんな時間が。

色々、主に野菊の電車酔いなんかで大分疲れたがなんとか帰つてこれた。

もう風呂入つて寝たい気分だが、野菊が夕飯を作つてくれるらしいので少しだけ待とう。どうせ明日も休みだから遅くまで起きてもいいだろう。明日は一日中寝る事になるだろうけど。

「芳樹ー、風呂入つてろよー。その間に作つてるからー」

もう風呂の用意してくれたのか。

最初は、いきなりこの家に住ませろとか言われて迷惑だったが、こういう所は凄く感謝してる。

召使いになれとかいつてたけど、あれは多分素直に泊めてもらいつのが恥ずかしかったのだろう。結構かわいい所があるんだ。

「おい聞こえたかー？早くしろよー。それとも一緒に入りたいのかー」

「今はいるよー」

・・・・・・・・・・・・何かオカンみたいだな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あー、良い湯だな、アハハ。

最近気づいたけど、耳を洗い忘れたら気になりすげにどうしようもない。前に洗い忘れた時なんて服着た後なのにまた脱いで洗つたぐらいだ。それぐらい気になる。
まあいいや。それにしても良い湯だな・・・・・。

今日椿さんが気になる事を言つていた。

野菊と生きるなら覚悟をしろ。とりあえず今日あたり、と。
勿論覚悟はしている。野菊は鬼の娘なのだ。
普通なら追い返す所だろうが、何故か野菊を助けないといけない
気がした。

野菊は凄く俺のためにしてくれている。

だから俺も何かしてあげたい。少し怖いが、一番野菊のためにな
るのは、野菊のなくした記憶を思いだせる事だろう。
そういえば、野菊を殺した男の子孫がいるという噂があつたな。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・やはり気がひけるが、少
し調べてみるか・・・。

のぼせやうだからもつ出るか。

バタン！！

なんだ？今の音は。野菊か？

『覚悟はしておこなへください。とりあえず、今日あたり』

『とりあえず、今日あたり』

「！」

「野菊！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

急いで風呂をでて台所にいくと、野菊が頭を抱えてうずくまつ、悶えていた。

「大丈夫か！どうしたんだ野菊！？」

「あああア……ヤ、ヤメロ……！」

「あ、頭がーッ、わ、割れる、ヤメロッ！
でてくるなア……！」

野菊の頭は白皿を向き、涙がにじみ出ている。

「おい野菊！……どうしたんだ！大丈夫か！？」

「よ、芳樹！助けて！イヤアツ！だ、ダメだ！早く、早くッどう
かいけ！に、逃げろッ！早く……！」

野菊は白皿を向いたまま叫んでいる。

俺の方を見ていない。いや、俺がどこにいるか分からなんだ。
ただがむしゃらに、必死になつて叫んでいる。

俺はビックリで、いか分からぬ。

「は、早くシ、お願いだから早く逃げてくれ……。」

「一体どうしたんだーお前がこんななのに逃げれるかー！」

「お、お願ひシ、お願いだからあ……。」

見間違ひだらうか。頭を押さえた野菊の手の隙間から、尖った白い物が出てきてくる。

「あ、ああシ、よ、芳樹、逃げろオシ」

俺はどうすればいいなのだろうか。

野菊のために何かしてあげたいが、どうすればいいのかわからぬい。

何も出来ない自分が悔しい、憎い。

「逃げて、芳樹。た、頼むからシ、逃げて…………。」

目の前の野菊、いや、これは野菊か？

1

髪を振り乱し、頭には角が生え、尖つた爪を見せ、
牙を剥き出しにした、まさに鬼が目の前に立っている。

だがその鬼の目には悲しい涙がにじんでいた。

鬼

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

目の前の鬼は叫んでいる。

だが、その叫び声は悲鳴にもきこえる。

「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ」

ブンツ

「うわっ」

鬼は手にもつた包丁で切りかかってきた。

「ガアアツ、フーツフーツ、ウアアアアアツ！－！」

ブンツ、ブンツブンツ、ブンツ。

「うわっ、うわわっ！や、やめろ！落ち着け野菊！－！」

そうだ、鬼ではない。野菊だ。

野菊はいつも俺のためになってくれているんだ。
暴走する、俺を殺そうとする鬼を、野菊は泣き叫びながら止めようとしている。

「ガアアツ！…！」

ズガツ！

「うああつ！」

避けきれず、包丁は俺の腕を裂いた。

どうにか、どうにかして止めなければ。
逃げる事は簡単だ。

でも、ここで逃げたら野菊はどうなる。
絶対に逃げてはいけない。

野菊を見捨ててはいけない。

野菊は俺のために頑張っている。

俺のために苦しんでいる。

・・・・・・・・・・・・野菊に比べたら、こんな事くらい・・

「グアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ」

野菊は、包丁を大きく振りかざした。
今だつ！

「野菊――――――！」

勢いよく野菊を抱きしめた。

グサツ

「ぐああつ！」

包丁は俺の背中を貫いた。

「だ、大丈夫。もう大丈夫だ、野菊。心配するな。俺がいる。

いつでもお前を止めてやる。すまない。お前を苦しめてしまって。でも、もう大丈夫だ。

お前が俺のためになってくれたように、俺もお前のために、何でもする。

そのためなら、腕も背中も痛くない。

それ以上に、野菊が苦しむ事の方がつらい」

「グ・・・、グアアツ・・・・・・」

抱きしめる力を少し強くする。

「だから、これからは一人で頑張ろう。

お前の中の鬼が暴れたら、俺が絶対止めてやる。お前のためなら、何も怖くない。

大丈夫。もう何も怖くない、心配しなくていい。

苦しまなくて、いい・・・・・・・・・。

野菊が俺の腕の中で泣いている。

「…………ウ、ううう…………、あ、ありがとう芳樹。」

「泣くなよ、うらしくないな。

お前にはもつと、もつといつぱい笑つてほしい。
もつといつぱい、お前の笑顔が見たい」

גַּם־בְּנֵי־הָרָבִים

わ、わかつた

いつ、いつはい・・・・・・笑うから、もうといつはい、
「一ぱ一笑うからツ

いはい第三十九

「……………ありがとう・・・。

見舞い

「体調はどうですか？芳樹様」

「もう大分良くなりました。いつもすみません、椿さん」
「いえ、芳樹様のためですし、それに・・・・それに、私がもつと注意していたらこんな事にはなりませんでしたから」

「い、いえいえいえ！椿さんの言つことを聞かなかつた俺が悪いんですよ！椿さんのせいじやありませんよ！」

「ありがとうございます。でも、陰陽師として恥ずかしいです。事件を未然にふせげなかつたのですから」

「すみません」

「いえいえ！芳樹様のせいではありませんから！」

「「あ、」」

「ハハハ、」

「ふふふつ」

あの後、心配した椿さんが駆けつけてくれて俺は病院に運ばれた。幸い命に別状はなく、あと三日間もすれば退院できるそうだ。

入院生活は暇じやないかと思ったが、椿さん、瀬野崎とナツ、ついでに横山なんかが見舞いに来てくれてさほど暇じやなかつた。

ただ心配なのが・・・・・・・・

「あの、椿さん。野菊はどうしてますか?」

「・・・・今日も、来てないみたいですね・・・・・・・・

「そ、そですか~、まあアイツ料理できるから飢え死にはしないでしよう、アハハハツ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

芳樹様が入院したあと、野菊は一度も芳樹様のお見舞いに行つてない。

自分のせいで入院させてしまつて会いはずらいのでしがれど、芳樹様がそんな事気にしていない事くらいわからないのかしら。

陰陽師が鬼の心配するのもおかしいけれど、芳樹様も気にしているので少し様子でも見てみましょ。

ピンポーン

「・・・・・・・・

ピンポーン

「・・・・・・・・

ピンポーン

「…………いないのかしら」

ピンポーン

「野菊一、私よー、椿よーー」

ガチャ

あら、ドアが開いてる。やつぱりこりぬじやない。

「野菊一、勝手に入るわよー？」

返事はない。まあ入つても大丈夫でしょう。

「おじゅましまーす」

変わつてない。前來たときと全然変わつてない。
靴の置き方、半開きのドア、空氣すら変わつてない。
嫌な予感がある。本当に変わつてない。まさか・・・・・・！

「野菊ーー」

急いで台所にいくと、血の付いた包丁を持った野菊が膝を抱えてうすくまるまつに座つていた。

「何やつてるのよ野菊ーーまたかあの口からすうといのままでいたわけ！？」

野菊の手足は青白く変色している。間違いない、ずっとこのままでいたんだわ。

「とりあえず立ちなさい！何か作るからまつて！」

「……………いらない」

「何言つてるのよ！あれから何も食べてないんでしよう…？何か食べないと死んじゃうわよ！？」

「いらない」

「ダメよーちゃんと食べないと……………」

「いらぬいつていつてんだろ！！腹減らねえんだよ、あの日から！…ずっと何も食べてねーのに全然腹が減らねえ！全然動いてねーのにどこも痛くならねえ！なぜだかわかるか？俺が鬼だからだ！化け物だからだ！」

「野菊……………」

「頭の角もはえたままなんだ。芳樹に会いたい。怪我の看病もしてやりたい。でもこんな角があつたら芳樹に会わせる顔がないだろ！化け物のまま、芳樹に会えるわけないだろ！」

またお腹が減つた時に芳樹のクソ不味いオムライスが食べたい！芳樹が買つてくれた服で一緒にデートしたい！でも、もうダメなんだ。腹は減らねーし角ははえたままだ。芳樹のオムライスも食えねーし、芳樹が似合うつて言ってくれた服も、角があつたらきれねえ。俺は、もう化け物なんだ」

「…………あなた、馬鹿？」

「ああーー？」

「芳樹様がそんな事気にすると思ひ、芳樹様はあなたが鬼とわかつた上で一緒に住んでたんでしょう？それをいまさらなによ、角がはえたくら、じや芳樹様はきにしないわ」

「はじめなんかになにがわかるーー。」

「じゃあ自分で確かめればいいじゃない。角のはえた頭で芳樹様が買ってくれた服をきて、芳樹様に会つてみればいいじゃない」

「…………」

「私もう帰るわ、元気になつたみたいだし。お腹がすかなくても一応何か食べなさい。自分で作れるんでしょう？芳樹様がいつてたわ。それともうすぐ退院できるみたいだからひきとびにかしておきなさいよ？」

「…………」

「え、じゃあまたね」

「…………」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「あ――つ、退院だ!!」

俺は伸びをしながらいつた。まわりで何人かがへんな目でみたがきにしない。気になら心折れそうだし。

「退院おめでとうさん、遠藤くん」

「お話を伺いました」

「いい乗なしゃる、にあんたぞ」

二二

何か犯罪おかしたつけ？

まあいいか、これから自由だ。思いつきり遊ぶぞー！

椿さんの話では元気らしいけど、せっかく心配だ

「芳樹様」

遠くで椿さんが手を振つてゐるので恥をかかないように急いで駆け寄る。

「椿さん、来てくれたんですか？」

「はい、退院おめでとうございます、芳樹様」

「ありがとうございます」

「いえいえ、じゃあ早速帰りましょうつか」

「はい。そういえば、椿さん京都に住んでるんですよね…ずっと
ホテルに泊まってるんですか?」

「その話は今度改めてお話いたします。今日は芳樹様の退院をお
祝いしましょう?」

「あ、はい。ありがとうございます」

違和感がある。そして恐怖感も。椿さんの様子がおかしい気がす
る。何があるな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

家につくと、今まで前を歩いていた椿さんが俺の後ろにきた。

「どうしたんですか?」

「いいえ、何でもあつませんよ?」

あ、わかつちつた。これは多分、玄関開けたらクラッカーが鳴
つて、「退院おめでとーー」だな。

横山とか瀬野崎とか呼んでくれたのかな?
ありがたい話だ。俺の退院を祝ってくれるなんて。
よし、クラッカーの音に驚かなにようにしよう。凄くクールに入

つてか！」と決ぬやつ。よしよし、こへぞ！

ガチャヤ

どうした？クラッカーの音がしないぞ？

「お、おかえり、芳樹。退院おめでとう」

「あ、どうも……」

クラッカー + ゆかいな仲間達のかわりに、白と水色のフリフリなワンピースを着て、頬を赤くした可愛い女の子がいる。そしてその女の子は、頭に角がはえている。まさか・・・。

「えーと、間違つたら悪いんだけど、その・・・野菊?」

卷之二

大声だしちつた。でもなんだつて？この子が野菊！？信じられん、野菊つてこんなにかわいかつたか？

いや、嘘だろ。野菊つてもつと、なんか「一、ちがかつたもん。

「本当に野菊ですよ、芳樹様」

「
^
?」

「そ、その、退院祝いに、色々作つたから、その、食えつ」

かわいい

え
二
?

声に出はつた。

「二、二號、核取物證」

— 90 —

「わ、馬鹿つ、抱き付くなつ！！」

「ふふふつ、今だけは良いじゃないですか、野菊の好きにしてあげても」

・・・・・ そうだな。俺も少しだけ、こうしてみたい。

「はー、あーんっ！」これ野菊。

「あ、あーん」で、これ俺。

「…………」これは椿さん。

「うまーか？」また野菊。

「う、うん。んまい」で俺。

「…………ふう」つい溜め息が出る椿さん。

「じゃあもうイッチャコーあーんっ」ハイテンション野菊。

「あ、ああ」これまた俺。

「…………あの」そうだ椿さん。早く言ってくれ。

「どうした？芳樹」いやいや野菊さん。

「あ、あれ」もううるさい。

「ね、ねえ野菊？」やだよね？椿さん。

「早く食えよ、芳樹つ」もつこよな？

「ジブンデクエルカラー！ツバキサンモイルカラー！」

「え？」

「え？ ジャねえよ！」

「あ、 ありがとうございます、 芳樹様」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

なんやかんやで退院祝いパーティーを開いてくれた。

パーティーと言つても、俺、野菊、椿さんの三人で小さいテーブルを囲んで、野菊の手作り料理を食べてるだけだが。

それでも十分嬉しい。久々に野菊に会えたんだ。元気そうだし、俺が買った服も思つた以上に似合つてる。

背中も結構早く治つたし、いやいや、本当によかった！

「・・・・・お、 おい芳樹。 な、 何とも思わないのか？」

「なにが？」

「俺、芳樹の事刺しちゃったんだぞ？」

「ああ、その事か。あの時言つたろ？俺は大丈夫だつて」

「俺、角もはえたままなんだぞ？」

「いや、角つて普通ひつこむのか？」

「俺の事、怖くないか？」

「はははっ、怖いわけないだろ？むしろかわいいし」

「芳樹～～～。・・・・・・・・大好き～」

「い、いじり、いきなり抱きつくなよ

「いいじゃんかっ、久しぶりなんだから～」

「・・・・・・・・・・・・バカツブル、ですか」

あ、椿さん居るの忘れてた。

「いじまで仲がいいと、見ていろこっちが恥ずかしいです」

「す、すみません」

「なんだ椿、餅でもやいてんのか？」

「 いら野菊つ 」

「 ・・・すこしだけ、ね 」

え？

つーか、前より野菊と椿さんの仲が良くなってる気がする。何かあつたのか？

まあ仲がいいのは良い事だ。人間つて言うのは友情で成り立っているんだ。

ピンポーン

お客様か？誰だべ。

「 芳樹様は座つていてください。私が出ますから 」

「 あ、ありがとうございます 」

椿さんはすぐに戻つてきた。

「 誰でした？」

「 男性でしたが間違えたみたいです 」

家を間違えるのも珍しい。団地だからかな？

ピンポーン

まだだ。

「今度は俺が行つてやるよ」

「悪い野菊」

そしてまたすぐに戻ってきた。

「誰だつた？」

「女が一人。間違えたつて」

一連チャン。少なくとも隣の家とは似てないと思つねど。

プルルルル——

電話だ。次は俺の番だな。

「もしもし、遠藤ですが」

「（芳樹か？俺だ、直哉）」

直哉？誰だ？俺知らないぞ？

「えーと、どちら様？」

「（とぼけるなよ、俺だ。横山直哉）」

横山？俺の知つてゐる横山は・・・ああ、横山か。クラスメイトの。

「（もしかして芳樹、俺の名前忘れてた？）」

「そんな事ねえよ、ちやんと思出した」

「（忘れてたんじゃねえか！）」「

「わい。電話で大声だすなよ、耳いてえ。

「で、何のよつだ？」

「（こやせ、お前の退院祝いやるのと思つて、瀬野崎さんとナッシュンつれてお前んちの近くまで来たんだけどさ、お前の家分かんなくなつちつて）」

「勝手に人んちで祝おつとすのなよ。今どいだ？」

「（お前んちと間違えて一回もピンポンされた不幸な家の前）」

「まじかよ。一回田が男で一回田が女一入つて言つてたな。横山と瀬野崎とナッシュ、完全一致じゃねえか。

「その不幸な家をもう一回不幸にしてやれ。じゃあな

「（お、おい芳樹つ・・・）」

ガチャッ

玄関でまつか。

ピンポン

「はーい」

「うわっ、何でいるんだ？」

「俺の家だから。まあ入れ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「いやー、まさか芳樹に女の友達がいるとはーつい家を間違えた
と思ったぜ」

「遠藤くん、私達以外にもお友達いたんですね～」

「良かつたな、芳樹」

「の三人、横山と瀬野崎とナツは仲が良いのだろうか。

「おい芳樹、コイツら誰だ？」

野菊様が若干イラつこいらっしゃる。

「えーと、クラスメイトの横山と瀬野崎とナツだ

「「「よのしへ～」」」

三人揃つてあこせつ。

「よろしくお願いします、開花院椿です」

「寧に返す椿さん。

「けつ」

不愉快そうな野菊。

「おー野菊、ちやんとあこせつしれむ」

「ああ?」

「マイシの沸點せんだけ低いんだ

「しゃあねえな」

セウセウ、ちやんとあこせつすこと。 友情はあこせつからだ。

「芳樹の嫁の野菊だ」

おい野菊つー嫁はダメだー!

「おいおい芳樹ー、友達どもが嫁まじーるのかよ

「遠藤くんのお嫁さんですか、ついやめしこですか」

「角はえてる。鬼嫁」

「 「 「 「ええええええ———」

マジで仲良こな。 説明がめんどくさいだ。

「やあ、説明しろ芳樹」

「大丈夫、私は遠藤くんを信じてるから」

「信じてるぞ、変態芳樹」

もうめんどくせーよ。特に最後の奴が。
だがしかし、ここで説明を怠れば、俺の残り少ない学園生活が台
無しだ。

野菊にあいわつしろなんて言つんじやなかつた。嫌までよ？まさ
か、こいつなる事を予想して真面目にあいさつしたんじやなかろうか。
いやいやいや、何考えてるんだ俺。野菊は俺の事を夫だと思つて
くれてるんだぞ？そんな野菊を俺は疑うのか？
きっと、野菊もこの状況をどうにかしようとして笑つ
てやがる。あの野郎はめやがつた。

「お前がこんな奴だとはおもわなかつた」

「野菊さんのじい両親にもむやんと謝らないと、遠藤くん」

「死んで償え、変態」

もうガンガン来てるよ。完全に俺が悪者じやん。
しゃあねえ、良い感じにいっくわつか。

「つーわけだ。俺は断じて悪くない」

俺はほととぎの事を話した。

どうして出会ったか、何故この家に住む事になったか、野菊が何者か、今回俺が入院した理由。自分で驚く程、口から言葉が出てきた。あとはこいつらが信じるからだ。

「え、マジかよ

「じ、信じられません、そんな事が……」

「…………」

まあ、当然の反応か。こんな話、信じる方がどうかしてる。

「…………今話した事は全部忘れてくれ」

そうだ。それが一番良いのだろう。今更だけば、これは俺と野菊の問題だ。いつも巻き込むわけにはいかない。

「…………ナツは信じる

え？

「ナツツンだけじゃねえぞ。俺も信じる

「わ、私も信じますー！」

「な、なんでだよ。なんでこんな話信じるんだよ！」

「聞いてはみたが、本当は知っている。
俺達は友達じゃないか。固い絆で結ばれた、友人じゃないか！
そんな友達の言つ事を、何故疑う必要がある？
そうだ、俺達は友達だ！」

「何故信じるかって？そんなの当たり前だろ？」

ああ、ありがとう横山。

「そうですよ、遠藤くん。当たり前です」

ありがとう瀬野崎。

「決まってるだ、芳樹」

ありがとうナツ。

「だつて」

「だつて！」

「だつてーー！」

「そうだ、俺達は！」

「野菜さん」魚はえてるじゃん」「

「野菊さんに角はえてたら、大体の事が眞実だろ」

付けてる感じしませんもの。ねえ？」

「うん、妖氣感じる」

あれ？ 友情は？

友情より角一本？

「良かつたじやねえか芳樹、話の分かる友達でよお」

陽師やつて初めてです

「すごいです。こんなに簡単に妖怪の存在を信じる人なんて、陰

待つてくれ。状況が良くわからないんだが。

「よしつーじゃあ退院祝いパーティー再開だー!とりあえず自己紹介、芳樹のクラスメートの横山直哉でっす!」

「遠藤くんのクラスメートの瀬野崎優花です～」

「芳樹の腐れ縁、ナツ」

あ、友達って言葉が出なかつた。リアルで心が痛い。

「芳樹の嫁の野菊だ」

「陰陽師の開花院椿です」

・・・・・一応、退院祝いしてくれるんだよな。

「・・・・・遠藤芳樹です。野菊の・・・・・」

「家族、かな」

一日

「起きろー芳樹！」

「起きてる」

朝から元気な奴だ。理想としては

「おはよう芳樹、良く寝れた？」

みたいに優しく起こして欲しいが、相手が野菊なら叶わぬ願いだろう。さつき想像した人おチチが大きかつたし。その時点でもうダメだよね。

「背骨引っこ抜くぞ？」

あれ？聞こえてないよね？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「あー、暇だ」

何もやる事ない。」(つづく時にほー)

「寝るか」

「い、いきなり何言つてんだよ。まだ毎回だぞ？ま、まあ、芳樹

がしたいなら・・・お、俺は、良いケド・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・思春期か？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

もう夕方だ。

「なあ野菊、晩飯何か食べにいくか？」

「おひつ、俺の作つためしゃー食えねえつて～事か？」

今度は何に影響されたんだ。

「そう言ひ事じやねーよ。一田中家に居たから少し外に出ようと
思つただけだ

「別に良いけど、何にするんだ？」

「野菊は何がいい？」

「俺は何でもいいぞ。ラーメンでもいいし

「そうか、じゃあ最近出来たフアミレス行くか？」

「ああ、いいんじゃねーか？そこが駄目ならなあ、別にラーメン
でもいいし」

「あ、イタリアンとかどうだ？初めてだろ」

「イタリアンか、初めてだ。初めてとこやあ、ラーメン何かも初めてだな」

前に食つてたよ。

「…………ラーメンにするか

「ただいまー」

「腹いっぱいだー。もう寝るか

「よ、夜になつたからつてそんなに焦らなくても……。まだシャワーも浴びてないのに……。

めんどくせー。

「おやすみ、野菊

「おやすみ

「な、なあ芳樹つ

「んー?」

「さあ、今日は・・・・・・一緒に寝ないか?」

「お前一緒に寝るで」

「ばあ、馬鹿! 变な事妄想するんじゃねえよ!」

お前だよ。

「いいぞ、枕持つて俺の部屋来いよ」

「ま、枕はいらねー」

「首痛くなるぞ?」

「芳樹のを一緒に使つかひ・・・・・・」

・・・・・ 今日の野菊はやけに甘えてぐるな。

=====

「なあ芳樹? 一人きりになるのは久し振りだな

「そりゃめんな、一度も見舞いに行けなくて

「そりゃあれればそりだな

「いいよ、気にするな」

「角、はえたままだ」

「大丈夫、野菊は野菊。変わりはしない」

芳 橙

なんた?

卷之三

寝言か

あ、
野菊のよだれか。
俺の枕なのに。

思った以上に平常心が保てない。

月曜日

芳樹は俺より早く起きていました。

「何時に起きたんだ？」

と聞くと、11時と答えました。頭がおかしくなったのかと思つて、病院に行くよつに勧めましたが、時計を見ると午後1時でした。昨日の夜に遅くまでテレビを見ていたのが悪かつたと思います。

火曜日

今日、野菊が「相方」という刑事ドラマの、頭がいい方の人のモノマネをしていました。

野菊は自信満々でしたが、正直あまり似ていませんでした。

水曜日

角はまだはえたままで。

芳樹は気にするなと言つてくれましたが、やっぱり女の子として角があるのは恥ずかしいです。

「え？ 女の子？」

木曜日

「ン」

昨日野菊に殴られた頭がまだ痛いです。
いつもいつも一方的に殴られているので、仕返しをしようとしましたが、女に手を擧げるのは気がひけるので止めました。

優しい男は好きですか？

金曜日

今日もいい天氣です。俺は女なのに、いや、女の子なのに一人称が「俺」です。イメージチェンジをしようと思います。

「吾が輩の名は野菊である。」

土曜日

二次元の女の子は絶対に可愛い。オタクが恋するのも当たり前だ。だつて容姿、性格、スタイル、すべてがそのキャラに恋をさせる為に設定されているんだ。

だから分かるか？

「二次元に恋する奴とかキモイ」とか言う奴なんて糞くらいだ！
二次元最高！！

「芳樹？何かあつたのか？浮氣したと見ていいか？」

日曜日

「一週間どうだったよ」

「糞だな。吾が輩は凄くつまらなかつた。芳樹のせいだ」

「吾が輩やめろよ。前の方がよかつたぞ」

「…………」

「…………」

「…………」

「い、痛い、心が痛い」

「…………」

「明日どうかいくか」

「どうだ？」

「決めてない」

「…………芳樹と一緒にどうぞ」

「じゃあ家でもよくな?」

「…………」

「今日何日だっけ」

「えーっと、31

「明日から学校だーーー！」

ジフンラナグサメール

「行つて来まーす」

「いつてらつしゃーい。早く帰つてーいよー」

「おーう」

今日から学校だ。なんといつ爽やかな朝！
生徒もまだ歩いていない。きっとクラスで一番だらう。起いじて
くれた野菊に感謝だ。

「・・・・・・・・」

いやいやいや、駄目だ。そいやつて何回遅刻したことか。寄り道
なんかせず一番で学校について皆を脅かしてやるう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「おはようございます！」

「おはようじゅありません、遠藤くんーもつお皿ですよー。新学期
早々遅刻なんて・・・・・・」の授業が終わるまで廊下に立つて
て下さいー！」

「すみません先生、立つてます」

お前初日から連刻してなんたよ」

「やうですな、遠藤くん。学校は朝から」なこと

一
怠けるな、
芳樹」

何でこいつらいつも一緒になんだよ。

「まあそんな話はいいとして、今田カラオケいかねー?」

「良いけど何人で？」

「俺と」「私と」「ナツだ」

仲良すぎでうぜーな。

「いつもと同じメンバーか。いいぞ、暇だし」

「遠藤くん、野菊さんも誘つたらどうですか？」

あー、
野菊かー。

「別にいいんじやね？歌える歌もないだろ」

「よーしつ、じゃあ歌つかー！」

「「『」」」

ついでカラオケに来た。

まあ飽きないからいいけど。

「……じゃあまでは私がらーーー！」

よー！瀬野ーち！」

卷之三

——畠に瀧野嶺か　瀧野嶺にていたるあの曲か

和の歌を聴け！！

ほら来た、有名なアニメソングだ。瀬野崎は以外とアニメが好きらしい。女の子だからB-SIDEとかが好きなのかと思ったら、割とギャルゲーが好きらしい。

「一次元の女の子って可愛いですよね～。どうですか？遠藤くん。この子なんて、凄く恥ずかしそうな顔してつ。もう～溜まりませんつ！」

とか言つてたな。

「じゃあ次は俺な〜」

今度は横山か。

「俺の歌を聴けー！」

お前それ関係ないだろ。まあ言いたくなるけど。
横山はま〜、流行ってるアイドルの曲とかだな。
特にエピソードはない。

「次はナツだ」

「頑張つて、ナツ〜」

「頑張れナツッソーン！」

続いてナツ。ナツは流行りの歌とかは知らないらしい。
歌う曲はー・・・・よくわからん。聞いた事もない歌手の歌とか
歌つてたな。

「今日は皆が知ってるヤツ歌うぞ」

おお、珍しい。何歌うんだろ。

「芳樹も蠅人形にしてやるうかー！」

何故限定されている。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「いや～、楽しかったー。芳樹も混ざってカラオケなんて久し振り
だつたな」

「そうですね～、やっぱり遠藤くんが居た方がいいですね～」

「芳樹、乙」

「おい待て、俺の知らない間に三人でカラオケ来てたのか。俺だけ
誘われなかつたのか。」

「まあ怪我してたんだからしじょうがないよな～」

「ああ、俺入院してたんだつた。
なんか救われたわ。」

「じゃあまた明日な～」

「明日は遅れちゃ駄目ですよ～。遠藤くんつ」

「また明日だ、芳樹」

「おひつ、じゃあな。また明日～」

「おひつ、こんな時間か。野菊待つてるだろつじ早く帰ろ。」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ただいまー」

返事がないな。

「おーー野菊ー。ビニードー」

ビニーいつたんだろ。

「・・・・・んつ・・・・・んしきつ・・・・は、はやくつ・・・・

ん？野菊の声だ。この部屋か？

クチヤ、クチヤクチヤ、クチユツ

なんだ？この変な音。

「よ、よし・・・・・・・・は、はやく・・・・・・・

クチヤ、クチヤクチユツ・・・・・クチヤツ

あそこのソファーに寝そべってるのって、野菊？

「よしきつ・・・・・・・

クチヤクチヤツ、クチユツ

「この声にこの音、もしや野菊、自分を慰める行為をしているのか？あ、あり得る。良くパソコンでこつそり見る大人向けアニメであるぞ？」

結婚したのに、その、夜の嘗みがない妻がよく、自分を慰める行為をしている。

まさにその状態じゃないか。野菊最近そういうのに敏感だし、一応野菊は俺を夫だと思つてるんだ。

明らかにそうじゃないか。野菊は今自分を慰める行為をしている。どうしよう。チョー緊張してきた。逃げるか？ 一旦玄関までいつもう一度大きな声で「ただいま」と言つか？

いやいや、男としてどうよ。今まで我慢してきた自分を慰めるている野菊が可哀想じゃないか。

男として、夫として、覚悟を決める芳樹！ 大人になるんだ！ 行くぞ！ 父さん、母さん、俺は今から、大人になりますーー！

バツ！

「今まで悪かつた、野菊！ だがもう大丈夫だ！ 俺も覚悟を決めた！ もう自分を慰めなくていいんだ！」

「よしそ、覚悟はいいらしいなあ芳樹。今何時だと思つてんだ？ はやく帰つて来いつていつたよな？ 今まで待たせたんだ、歯が全部無くなるぐらいには覚悟しろよ？」

あれ？ なんか違くね？ 自分を慰めてるんじゃないの？

「つておい！ お前何食つてんだよー！」

「クツチャクツチャ、ガム、クツチャ」

「クツチャクツチャ、つるせーなー、こつぱこあつたろー、全部食つたのか！」

「うるせー！ こんだけ待たせたんだ！ ガムの10個や20個くら
い無くなるはボケエ！！

「いやなくならねーだろー! いつからクッチャクッチャしてんだ!」

「朝」

「お前暇かよ！」

「暇にしたのはテメエだろー。学校なんかいきやがつてー。」

何言つてんだこの女。意味分からん。あーたまおかしーんじやないの〜。

「とりあえず仕置きだ。」のガムで窒息しろ」

の元へ。・・・・・。

「……………オーナーでもしてろ！」

!

お、まつやめた。

「じゃあな遠藤」

「おー、また明日ー」

長い一日が終わり、ついに放課後になつた。いや、長かった。特に数学が。

「このあと何か用事はありますか？遠藤くん

「よお瀬野崎。ナツとアイツ、えーと、誰だつけ？一緒にないなんて珍しいな」

「し、親友の名前くらこひやんと覚えてあげてください。。。。」

親友ね～。名前なんだつたつけかな～。

「一緒に帰ろうと思つたら私だけ省かれちゃつたんですー私頭にあちやいました！」

「ほおー、マジで珍しいな。瀬野崎だけ省かれるなんて。どうしたよ」

「しつませんつーナツと横山くんの事なんていいですかー、どうかに行きませんか？」

「わかるよー、その気持ち。俺なんていつも省かれてるもん。いいぜ、遅くならなかつたら

「ありがとうございます。私達だけで楽しんじゃいましょう」

また野菊を怒らせなつゝに早く帰らねーと。

====

「到着です~」

瀬野崎に連れてこられたのせ、ビーチやハイアーメのグッズばかりを取り揃えた店らしい。

見たことあるアニメもあるが、ほとんどの知らないうアニメだ。多分深夜にやつてるんだろうな。

「遠藤くんは初めてですか？」

「まあな。ナツとか横山とかとは結構来てるのか？」

「いいえ~。ナツも連れて来たことないんですよ~。ここに私の友達を連れて来るのは、遠藤くんが初めてなんですね~」

ほー、ナツも連れて来てないなんて、これは荣誉称号なのか？

「なあ瀬野崎、」

「あ、あのー。」

「え? な、何?」

「あ、あの、二人きりなので、ゆ、優佳って……呼んでくれませんか？」

「優佳？ああ、瀬野崎の名前？まあ瀬野崎がそう呼んで欲しいなら、別に断りもしないけど」

「え、遠藤くん、私の名前忘れてました？」

「あら、あ、みるみるうちに瀬野崎が小さくなつた。化学反応かしら。

「い、いやいや、忘れてないですよ、瀬野崎の名前はちやんと覚えてるよ？」

「優佳って呼んで下さっこ」

「あ、ああ。えーと、優佳？」

「あ、ああ～ん」

「うわっ、なんかすげー色っぽい声出した。

「え？あ、すみませんっ！」

そしていきなり謝った。

「……実は私、ナツ以外の人に名前で呼んでもらうのって初めてなんです。だ、だから、その、少しいい気分になっちゃって」

「へー、そ う な ん だ、優 佳」

「ああんっ…………あ、す、すみません」

「いや、気にしなくていいよ、優佳」

「はんつ！」

「じゃあ店の中見てみるか」

「あ、あの遠藤くん? やつはり名前で呼ぶの? ・・・」

「優佳」

「あはんつ！」

やべえ、大分おもしれえ。

「大丈夫？顔赤いよ？優佳」

「ああんっ！ や、止めて、も、もう、私・・・」

「どうしたの？優佳」

「あああああああ～～～～んつーーーー」

うわばつ、思つた以上に声出しあがつた。周りの人全員こつち見てる。

「ブヒラシ」

「テメエ写メ撮んなキモオターブヒヒッて言つなブヒヒッて！」

「やばい、一刻も早くここから立ち去らないと。」

「おい、一旦場所を変えよう。立てるか？優佳」

「はうあああんつーわ、私、おかしくなつちやううーんー。」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「うー、じめんなさい遠藤くん」

「いや、俺も調子に乗り過ぎた。じめん」

あの後、立てなくなつた瀬野崎を抱えて近くのファミレスに入つた。

何人かが不振そうな田で見てきたが、人たすけ全部をしていると自分に言い聞かせ何とかここまでたどりついた。

「おつ落ち着いた？」

「はい、すみません、迷惑かけちゃって」

「いや、俺が悪いから」

「違います、遠藤くんのせいじゃありません。私が名前で呼んでなんてたのんだから……」

「…………」

「今日まだ帰らつか

「そ、そつですね。今日まだ帰つて落ち着きたいです」

「家まで送りつか?」

「いえいえいえーそんなに迷惑かけられませーー」

否定はえー。

「今日まだみませんでした」

「いや、マジで俺のせこだから。気にしてないで」

「…………すみません。じゃあまた明日、遠藤くん

「わい、またな優……」

「んううー。」

「せ、瀬野崎」

「……あ、あの、私、名前で呼ばれるのなれまさから、また名前で呼んでくださいね？」

「ああ、協力するよ。じゃあな、瀬野崎」

「はこつ、あつがとひげをかした、遠藤くん！」

わ~て帰るか。この時間なら怒られまい。野菊に向か翼つてひつてひつかな。

上めよ、金なこし。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「よつ遠藤、朝かりこなんて珍しこな

「雪、ふの」

「よお、横山、ナツ。昨日ビーに行つてたんだ？大変だつたぞ
何かあつたのか？」

「優は芳樹と二人きりになれたから嬉しいんだ」

「そんな事もな」と思つけどな。

「まさか芳樹、野菊さんがいるのに瀬野崎といつて事やつちつたん
じゃねーのー？」

「許さない、芳樹」

「それはねーよ」

「あるわけなこよ。

「おはようございます、横山くん、ナツ」

「おう、おはよう瀬野崎」

「優、おはよう

「噂をすればなんとやらだな。

「おはようついでこます、遠藤へさつ」

「おはよう、優佳」

「おお、芳樹が瀬野崎の事を名前でよんでも…」

「んああつ！だ、ダメ、ですよ、みんな見ていますから」

「ああ、『めん、つい・・・・・』」

「名前を呼ぶだけで感じさせるとは・・・。凄い事やつたんだな。いや、感じさせるとこいつ事は・・まさか今も…？」

「芳樹、不潔、優、淫乱」

「テメエ等何言つてやがる」

「いんつ、そんな言葉どいで覚えたの！？ナツ！」

「せ、瀬野崎の中にはブルブルふるえる大人のオモチャが・・・・・」

「

「「入つてねえ！

入つてません！」」

「オハヨー」

「おせーぞ芳樹、朝飯作つてあるから早く食え。そして今日は買
い物いくぞ」

「フリーけど今日も学校だ。普通学校は一週間、土日以外は学校
だからお前に付き合えるのは一日間だ。次の休みまで待つてくれ」

「ああ～？ なら今日は休めよ～」

「あのな～、休みが多いと毎年しきゅうなんだよ」

「リュウネン？」

「簡単に言えば、また今の学年の勉強をするんだ。ヤバければ永
遠高校生って事」

「意味わかんね。つまり俺より寺子屋みてーの方が大切ってか」

寺子屋で。

「別に元気のいい訳じゃねえけどよー」

ピンポン

お？ こんな朝から誰だろ。

「誰か来たから話は一回終わりだ。兎に角今日は休めないから」

「あつ、テメエ！」

誰だか知らないけど感謝だな。朝から訪問は少し迷惑だけど。

「ハイハイひらひら様〜？」

ガチャ

「おはよつじります、芳樹様」

立っていたのは椿さんだ。ただ妙なのは・・・・・・

「あの〜、椿さん？それってうちの学校の制服じゃないですか？」

「はいっ、芳樹様とお揃いです」

あ〜、何か可愛い。朝から景気がいいな。

「実は、芳樹様と同じ学校に転校したんです」

「マジですか！？家京都じゃないんですか！？」

「野菊の事もあるのでこっちに引っ越してきたんです。
私一人暮らしになつたんです」

「いつからですか？今日？」

「えーと、二学期が始まつた時からですけど・・・・・」

「へー、気づかなかつた。何組ですか？」

「二組です

「三組？俺も二組だよな。親友の名前を忘れる俺でも、転校生が来たら流石に気づくぞ？」

「芳樹様は一年生ですよね？学年が一緒なら同じクラスだったのですけど……。残念です。」

「ああ、学年が違うのか。

「椿さんは何年なんですか？」

「すみません、まだ歳を教えていませんでしたね。芳樹様の一つ下の十六です」

「あ、俺より年下だったんですね。ずっと同じ年だと想つてしまつた」

「そうならよかつたのですが……。本当に残念です」

「何か年下とは思えないくらい気品があるなー。野菊もこんないいのに。

「何が言つたか？」

「つわつー」

「ピックリした～。

「朝からなんか用かよ椿」

「ええ、今日は芳樹様と一緒に学校に行こうと思つて」

「あ～、まだ用意出来てないんでしょうか～と待つててやれ～。體が
ますから」

「飯も食つてねえや。椿さんも遅刻にしちゃ悪いから早くしないと。
ちょいちょい野菊が役に立つ。」

「なんだよお前も学校かよ。そんなにいいもんかね」

「ええ、凄く楽しいわよ。芳樹様と一緒に生きにこなれるし」

「芳樹はや～り～」

「嫁の父か～」

「あ～よ～、前から思つてたんだナゾよ～、芳樹と俺で話しか方違
くね～」

「・・・・・・・・・・・・

「椿？」

「・・・・・・・・・・・・

「おーい椿ー？」

「少し黙りなさ……」

「お待たせしました椿さん」

「いえいえ、全然待つていませんよ?」

「おこづま……」

「少しだけ黙つて……」

「行あましょつか椿さん」

「はこづ……」

「おこづ」

「じやあ野菊、行つてくるかい。旦締まつひとつかよ

「じやあ行つきますね、野菊」

「お、おこ」

「行つてあがーす」

ガチャツ

「……………んだよ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「じゃあな遠藤ー」

「また明日、遠藤くん」

「じゃあな、芳樹」

「おーう、また明日ー」

ついに放課後。

・・・・・今日は前から決めていた野菊の夫・・・・元、夫の祖先を探す。

凄く不安だが、でも野菊の為だ。本当に居るか分からぬけど、でも探すだけ探そう。もつ決めた事だ。

「芳樹様、一緒に帰りませんか?」

「椿さん」

ちょうど良いかもしだれない。

「あの、椿さん」

「なんですか?」

「・・・・・実は、野菊の昔の夫の子孫を探そうと思つたのです

「・・・・・え?」

「野菊の元夫の子孫が居ると云つ噂があるんです。少しでも野菊の為になるなら、あつてみたいとおもつて」

「…………や、さあ、野菊が待っていますよ、早く帰りましょ、」

「え？ あ、あの、」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ただいまー」

「おかえりー」

「椿さん、何か食べていきますか？」

「いえ、今日は遠慮します。明日も一緒に行きましょうね、芳樹様」

「あ、はい。送りましょ、うか？」

「いえ、大丈夫です。少しよつていく場所がありますので」

「そうですか。じゃあ気をつけて帰つてくださいね」

「はい、それではまた明日」

「また明日ー」

「どうした野菊」

「……………何でもねえっ」

「……………」

何
だ
？

学校！

よしひ。準備オッケだ。

ピンポン

お、来た。タイミングバッチリ。

ガチャ

「おはようございます、椿さん」

「おはようございます、芳樹様

「おーい、野菊一。行つてくるからなー」

「…………おひ」

「じやあ行きましょうか、椿さん」

「はーい」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝放課後＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

今日は俺から椿さんの教室に来てみた。

「椿さん」

「芳樹様、すみません来てもらひやつて」

「いえいえ、登校の時は椿さんが来てくれるの」

「ありかといひやつります。では、行きましょうか」

「はい。あの、視線が怖いっすね」

椿さんのクラスの人の視線がスゲー怖い。
そして時折聞こえてくる・・・・・

「ねえ、あれが開花院さんの彼氏?」

「年上なんだー」

「わざわざ放課後迎えに来るなんて、亭主関白じゃない」

「実は開花院さん、本当は付き合いたくないんじやない?」

「男の方がしつこ過ぎて仕方なく付き合つてるとか」

「うわ、サイテー」

「開花院さん可哀想ー」

散々行つてやがる。

「あの、椿さん。凄く勘違しされてますけど

「そうですねー。」(うこうう時は

?

スルツ

「うわっ！」

椿さんはいきなり腕を組んで来た。

「ちよっと椿さん、これじゃもっと勘違いされちゃいますよー。本当に付き合つてりみたいになっちゃいますー！」

「誤解を解く為です。芳樹様が亭主閑白なんて。私が好きだから付き合つていると思わせれば、芳樹様の誤解が解けます」

はあーー？

「いや、それじゃ肝心な所の誤解が解けてませんよー。」

「わあ、早く帰りましょー、芳樹様つ

ギュツ

む、胸が、おチチがあたつとる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「おかえり芳樹ーー！」

「おーう、ただいま。じゃあ椿わん、本当に送つてかなくていいんですね？」

「ええ、大丈夫です。すぐ近くなので」

「気をつけてくださいね？」

「はー。じゃあ、明日の朝も来ますから」

「ありかどひい」やこます。じゃあまた明日」

「わよひなひ」

「いつも俺が送つてもひつて、なんか男として不甲斐ないな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ひうつた？野菊」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「わつ、なんだよ」

「テメエ朝から椿とこひやつさやがつて！お前には俺と言つかわいい嫁がいるんだから学校なんていってねーで俺に付き合えー！」

「だーかーーー、次の休みまで少し待つてくれって

「じゃあ椿とこひやつへの止めりー浮氣行為だー」

「いや、こちゅついてねーよ。同じ学校だから一緒にいくのは普通なんだよ」

「つせーーー浮氣行為だ馬鹿芳樹！俺より椿の方が大事か！学校の方が大切か！」

「そつ語つ訳じやねえつて……」

「貴様死ね——！」

「うわっ、またーどこからそんな木刀……ギヤー——」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「おはよつじります、芳樹様」

「お、おひ、おはよつ、椿」

「……おはよつじます、野菊」

「お、俺は芳樹だぜ？野菊なら一階で寝てるぜえ？」

「……おはよつじます、野菊。それ芳樹様の制服

よね？」

「芳樹なら一階で寝てるぜ？」

「じゃあ、野菊は？」

「野菊なら、一階で寝てるぜ？」

「じゃあ、あなたは？」

「芳樹だぜ？」

「……………何してるの野菊？」

「うるせえな！俺は芳樹だって言つてんだろ！芳樹が俺で野菊が

芳樹！」

「あなた結局野菊じゃない！」

「芳樹だぜ？」

「黙りなさい！一本物の芳樹様は死んだ！」

「昨日木刀で頭打つて寝てる」

「絶対野菊がやつたんだじょ！」

「俺は芳樹だぜ？」

「……………めんどくさい」

＝＝＝

「ああ野菊、なぜこんな事したの？」

「うだぞ野菊。まだ頭いてーぞ」

「…………だつて。芳樹俺より学校の方が大事だから。俺も学校がどんな物か気になつて」

「それで俺を半殺しにして、お前が俺になつて学校に行こうとしたと」

うーん、「イツ思つた以上に馬鹿なんじゃね？背もちザーし声もちげーし性別だつてちげえ。唯一同じなのが同じ人間つて事……・・・・・・・・・これもちげえ。

「つまり、学校に行きたかったのね？」

「…………おつ」

「いやー、どう考へても無理だ。生徒じゃないと校門すらぐぐれないぞ？」

「…………じゃあ俺も生徒になるー」

いやいやいや、それは無理だ。

「あのねえ野菊、学校つて思つ以上に大変なのよ、週一日しか自由な日はないし、毎日勉強よ？それでもあなたは学校に行きたい？」

「おつわー」

「そう、ならいいわ。今すぐ学校行けむよ！」にしてあげるから」

「いや無理ですよー何勝手に決めてるんですか！」

？」

「いや、？じゃなくて！学校行くにも金が必要なんですよ？家に野菊を学校に行かせる金なんてないですよー。」

「その事なら大丈夫です。お金は全て開花院家が持ちますから」

「……………でも、いや、でも

椿さんは耳打ちしてきた。

「陰陽師的にも野菊が家に一人で居るより、私や芳樹様の居る学校の方が安心出来るんです。大丈夫、開花院家で上手くやりますから」

何者なんだ開花院家。

「やつたじやねーか芳樹！俺もが野菊に行けるぜー！」

も一ひとつにもなれつ。

日後

「手続きは済ませました。今日からでも学校に行けますよ」

「よしあーーーあ早速行けば学校！」

「ただし！」

「な、なんだよ」

「今日は日曜日です」

「ズコッ」

先が思いやられる。不安しかねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5052w/>

一つ家の鬼娘！

2011年11月26日15時52分発行